

第三部「幻想的身体」

・「最も下等な生き物が、意識生として、われわれの想像力からはるかに遠く暗冥の世界を生きていると想像せよ。それが世界を感覚するとは、そこに何らかの情動（＝エロス性）が生起することを意味する(12)。

・「われわれはスピノザを変奏して、「快」を、身体が現にある存在状態を肯定、固執、維持あるいは強度化しようとする力動とし、「不快」（苦痛）を、身体が現にある存在状態を否定、嫌厭し、この存在状態から逃れ出ようとする力動、とみなすことができる(15)。

・エロスの力動としての「快－不快」という原事実。→人間の場合、これは「幻想的身体」において幻想的「快－不快」となる(15)。

・人間は、エロス性を直接的に感受するのではなく、「遠隔知覚」によって、時－空間的な世界を作り、隔たった対象とのあいだの関係を生み出す。いまここにはない対象からの「快」を得ようとして、自らを企投する(16)。

・フロイト説に対する批判：「一般の人間には、性行為は身体的興奮を鎮静させるためであるという説は、直観的に説得的とはいいがたい。」(17) 遠隔知覚によって、人間のエロスは、「エロスの予期－不安」という体制になる(25)。

・【享受としてのエロス】「ひどい渴きを覚えて水を飲むとき、そこでは、思うさま快を食うことのエロス（エロスの充溢）が身体の全域にみなぎるが、不快を取り除きたいという衝迫は存在していない。身体的エロスの本性において、「快」の本質は第一義的に「食うこと」すなわち「享受」であって、「回復すること」、定常状態への復帰ではない。快の本質はいわば「もっと」求める「力への意志」であって、回帰への欲望とはいえない。いいかえれば、快の第一義性は、「乗り越え」であって「打ち消し」ではない。」(18)

・人間においては、「定常状態に立ち戻ると存在は飽満し退屈が生じる。そして身体的な欠如のない定常状態それ自体が一つの欠如であるかのように、新しいエロスを、何らかの能動のエロスを求める。・・・このような人間のエロスの特質は、人間身体の独自性、すなわちその「幻想的」本性に由来する。幻想的身体性とは、端的に、「自我」が第二の身体的原理となること、を意味する。」(22)

・二つの「身体的快」：(1)ある否定性を打ち消すエロス、(2)現にある定常状態を超え出ようとする能動のエロス(22)

・「人間では、多くの不快や苦痛を耐えることが、何らかのエロス＝享受によって購（あがな）われるのでなければ、生そのもの、存在そのものが耐えがたく無意味なものとなる。」(23-24)

・レヴィナスは、人間の生の基底を、ハイデガーのように存在不安としてではなく、エロス性、糧、充溢、味わうこと、「享受」として捉えた(27)。しかし竹田は、「快－不快」の二元性こそが、世界分節の根本原理であると捉える(30-31)。

・【身体】「感受－情動－衝迫－企投－能（あた）うという生成変化の磁場の中心」(32)。「身体の本質的契機に属するのは、第一に「エロスの感覚」、第二に「われ欲す」としての「存在可能」（ありうる）、第三に、これらと等根源的なものとしての「能う」Ich kann である。」

(32)

・フロイトのいう「快楽原則」と「現実原則」(35)

・人間は、第一の「欲求－身体」の上に、自己価値を欲し、またその価値を問題にする「自己意識」を形成する。自己意識は関係形成の契機を持った第二の「欲望－身体」として形成される。自分はどうか「ありうる」のか。そのような問題によって、自己の身体は「幻想的対象」となる。人間の世界は幻想的世界となる。(38)

・自己の生が時間的な限定をもつこと（終末の観念）は、人間の欲望に根本規定を与える。「ここから「有限性－無限性」「本来性－非本来性」（あるいはむしろ「真－偽）、「聖－俗」「超越性」といった、人間における観念的欲望の本質的諸契機が現われる。」(43)

・人間は、動物と違って、(1)養育者とのあいだに言語を媒介とした関係を築き、(2)「笑い」や「あやし」といった「関係感情」の世界を築くことができる。(45)「「子」の「笑み」と「母」のあやすことの交互作用は、動物では存在しない関係的現象であり、その意義は、両者の間に「関係感情」のエロスという独自のエロスの審級を生成する点にある。」(47)

・あわせて、言語によるコミュニケーションは、自己の内的情動の世界を分節化する。(49)自我のエロスとは、承認されたいというエロスであり、このエロスの獲得をめぐる、自己意識の内的相克がはじまる。(53)

・「象徴的には、「子」はどこかの時点で、「母」の不在を泣かずに待つことを学ぶ。このとき耐えること、我慢することは、直接的な身体エロスの代償として、関係感情のエロスを確保するための一つの「能う」となる（泣かずに我慢して待つ「子」には、母親の優しさと、「よい子」という褒賞の言葉が与えられる。）」(55)

・フロイト批判(57)

・ラカンの解釈に従えば、「われわれは一方で、「自分自身」を愛し、もう一方で、「誰かから」愛されたいと願っている」(58-59)しかし正確に言えば、「「自分自身」への愛は「自己」が性的なリビドーの対象となるのではなく、身体的エロスから明確に分離した関係的欲望、「自我」への欲望としての「自己価値確証」の欲望であり、それゆえ「自由」への幻想的欲望へと展開してゆく」(59)。

・では「人間のエロスはいかにして身体エロス、関係感情のエロスから「自我」のエロス（承認欲望と自己価値欲望）へと転移するか」。(60)それは「自己を世界の中心的主人公とみなす思春期的「自己欲望」が、失敗の反復によって・・・挫折を蒙（こうむ）らなければ、「自己ロマン化」は自己形成の本質的な一プロセスとなり「自己理想」の形成へといたる。「自己欲望」は、この時期に、方や社会的な承認競争のうちで成功を得ようとする自己実現欲望を育てるが、一方で、むしろ自分だけの「内的世界」を憧憬によって飾る内的ロマンを形成する。自己ロマン化は自分の理想とする世界への強い憧れであり、この内的な理想（「ありうる」）への憧れは、一般的に「自由」への欲望と呼ばれてよいものである。」(62-63)

・「人間的欲望は、「身体」における諸欲求という基礎条件から離陸して自己存在配慮へと中心化されてゆき、この自己存在配慮の対象は、「愉楽」「幸福」「善」「真実性」などの目的概念と呼ばれる。」(63)

・「なぜ美しいものは、おいしいものでも、有用なものでもないのに、誰にとっても、欲しいもの、手に入れたいものとなるのか。」(66)

・「恋愛の欲望の本質は、その狂気性に、すなわちある種の“聖性”、言い換えればこの世ならぬ「超越的」な欲望としての性格に、その本質をもつ。この点で恋愛に象徴される美の欲望は、他の世俗の諸欲望とは区別されるべき理由をもつ——。」(67)

・ラカンの定式化：「欲望とは存在欠如の換喩である」。(68)

・「(1) なぜ、性器それ自体ではなく、むしろそれを隠すものがより大きな欲望の対象、つまりエロスの魅力の源泉となるのか。

(2) なぜ「視ること」が欲望の対象となるのか。なぜ「視の領野」が問題なのか。

ラカンの答え。・・・人間の意識とその主体性は分裂している。すなわち目と眼差しは分裂している。目は自分の見ているものを見ている、と考えているが、じつは欲望の眼差しは何を見ているのかを知らない。《欲動かそこで機能するかぎりでの視るという水準には、他のすべての次元において認められるのと同じ対象「a」の機能が見られます》『精神分析の四基本概念』(69)

・【ここで問題の整理】(71)

(1)対象の形象的知覚それ自体によって、美的感覚を喚起することがある。

(2)人間の性的欲望(エロティシズム)においては、必ず対象の美しさが問題になる。

(3)エロティシズムにおいては、フェティシズム的誘引がその本質をなしている。

→以上の三つの関係をいかにして説明するか。

・フロイトの説のまとめ(102)

・「無意識」という深層心理をうまく解釈できるのは、自分とは限らない。「あなたはあなたの真の欲望を知らない」。(207)

・人間の主体性は、実はすでに文化と権力の見えないシステムによって規定されているのであり、そこに隷従している。(→この隷従(抑圧)から解放されないかぎり、真の主体性を獲得することはできない。)

・「深層文法は「主体」を否認し、人間存在からその主権的主体(自由)という本質を剥奪する。「心」を一つの有機体的器官と、あるいは、リビドー的エネルギーによる熱力学的メカニズムとみなすこと。「主体」の欲望はその真の対象を目隠しされた仮象にすぎず、むしろ、「主体」を特権的なもの、自由意志とみなそうとすることは「主体の形而上学」にほかならない、と考えること——。」(116)

→「真の主体は、自らの性的欲望に突き動かされているだけの存在ではない。それは真に欲すべきものを知っている存在であるはずである。これに対して性的欲望は、フェティシズムによって転倒した対象を求めるように仕向けるものである。真の欲望は、フェティシズムに惑わされることがない。エロティシズムやフェティシズムによって誤った方向に自身を導くことがない。そのような真の欲望を知るためには、自分の深層心理を知る必要がある。抑圧された無意識を知る必要がある。」およそこのような仕方、20世紀の知識人は「主体的啓蒙」の可能性を考えた。しかしこのような啓蒙には限界があるということ。

・「私のうちに無意識的なものが存在する」という言明は、自分にとって否定的な内なる欲望、情動、衝迫の存在を認め、そのありようを改善しようとする配慮とその企投的意志を意味する。」(133)

・【竹田の「欲望論テーゼ」】

(1)「あらゆる生き物（「欲望－身体」存在）は本質的に欲望－エロス存在である。すなわち、本質的に、認知的関係においてではなく、エロスの関係として世界に向き合う。あるいは世界とのエロスの関係が世界の認知・認識の基底をなす（・・・）。「欲望－身体」としての生き物のエロスの力動は、快と不快、そしてその時間化としての「エロスの予期－不安」という二元性において存在し、この原則によって自己維持と存続を調整している（これが快感原則と現実原則を意味する）。・・・」（139）

(2)「人間の「欲望－身体」（幻想的身体）の体制は、成育期の親子関係における「言語ゲーム」を通して、動物には存在しない独自の体制を、すなわち「関係感情」および「自己欲望」という新しいエロスの二元性の体制を展開する。・・・」（139）

(3)「人間は、幻想的身体性の形成プロセス、自己の固有の情動、欲求、欲望、感受性、美意識、倫理等々の発生の過程を自覚、記憶できず、したがって歩き方や話し方の経験的習得のありようが意識されないのと同じく、この発生の過程について「無意識」である。・・・欲望論的には、心的不調は「幻想的身体」の体制的不調であり、それが関係の形成に由来をもつものであるかぎり、関係的な再形成によって修復される可能性をもつ。深層心理学を含むさまざまな心理療法はこの象徴構造の因果性を仮説的に構想し、そのことでどのような仮説が治療的な効果をあげるのかを試行する。」（140-141）

・【能うエロス】「能う」エロスは、身体的な快－不快のエロス（フロイトではリビドーのエロス）とは異なった本質をもつ。それは身体的運動感覚がもたらすエロスであるとともに、主体的な「能う」の増大、すなわち対象を随意に操作し支配する主体性権能の、したがって潜在的に「自己拡大」のエロスである。この主権のエロスは、乳児にとって、最も基礎的な身体エロスとほぼ並行的に生成する。」（163）竹田は、人間のエロスが、この「能う」エロスへ中心性を転移する、と主張している。（164）

・【世界の初期分節】（172）

- (1)受動的な身体エロス。「快－不快」→「エロスの予期と不安」
 - (2)要求－応答関係における「満足－不満足」（機嫌－不機嫌）、「愉楽－退屈」
 - (3)母親の存在－非在、「安心－不安（不穩）」
- ・これらに加えて、「あやされたり、遊ぶこと」から生じるエロスがある。

第四部 審級の生成

・【「幻想的世界」の四領域】（267）

	可能性（生）	不安（死）
非日常	①憧れ ロマン	⑤聖なる世界 超越的（一般禁止線）
日常	①遊び（リアル）	③労働 競合 闘争
非日常	②エロティシズム	④異界（穢れの世界）（一般禁止線）

- ①「快－よい」 遊び、憧れ、ロマン
- ②「快－わるい」 いたずら、エロティシズム
- ③「不快－よい」 労働、義務
- ④「不快－わるい」 異界、穢れ
- ⑤超越的世界（恐れ、畏敬）

・「子」は、「母」がしばしば発する「きれい」という言葉を、それが美的な対象への指示として使われているときどのようなものとして理解しているだろうか。」(346)

(1) 形象指示了解：「子」はその形象性（色・かたち）が喚起する内的情動に注意する。」

(2) 関係感情所与：「子」は「母」が「きれい」と名指す対象を、その対象意味（用在ノエマ）においてではなく形象（色・かたち）がもたらす情動において見る。」(350)

(3) 対象的特性：「母」が「きれい」と呼ぶ諸対象の特質は、「子」にとって、対象の現れの向こうに何かよきもの、愉樂的なものを、それを十全に現わしつくさぬまま秘めているなにか、として総括されるだろう。対象の単なる形象性と用在的对象意味を超えて、何かを予感させるある期待に充ちた「背後性」と「世界性」をもつもの。」(352)

→つまり「子」は「きれい」という言葉を、その対象性が示す「エロスの予感」「背後性」「世界性」という特性といっしょに理解する、ということ。

・「きれい」はまた、対象のより一般的、抽象的、評価的な側面において清潔—不潔の感覚から離れて美的感覚を表示する「美しい」へと転移し、「美しい」の抽象的、客体的、批評的契機がさらに、事物対象の形象的美性を超えて、人間の心意、性格、営みが与える「適意」の表現へと、すなわち人格性や精神性の高さ（低さ）を表現するものへと転移する。」(365)

・「心的、精神的対象についての「美しい」という表現がもつもう一つの重要な含意は、「高邁な」「高貴な」「気高い」(noble, lofty, elevated, high-minded)、すなわち総じて精神的な「高さ」の含意である。」(389)

・「美しい行為」「美しい理念」「美しい理想」、これらの語法では、「美しい」は三つの概念性を含む。すなわち、第一に美的映像性、第二に純粹性、無私性、そして第三に、高邁さ、気高さ、高貴さ。」(389)

→「美」はしかし、「道徳」や「崇高」とは異なり、エロスの享受と結びつくため、背立的な要素がある。(392)

・「美」は、「異性の「可愛さ」や魅力一般へのはじめの気づきとして開始される場合もあるが、むしろ特定の誰かに強く引かれる体験として現れるとき、その本質的性格をいっそう露わにする。」(394)

・「他者のうちに体現化された「美」は、若者にとって、本質的に、ロマン的情熱の対象であるとともにエロティシズムの欲望の対象でもあるという二重性を孕んでいる。」(395)

・「他者のエロティックな美性は、そのロマン的な美性とは対立性を描く。女性性のロマン的な美の本質は、その存在が備える美質、稀有性、未知性、背後世界性から現れる他者の「無限性」の契機を強く含むが、これに対して、エロティックな欲望の対象の意味としての美は、誘惑と侵犯の契機が共犯関係をなして現出し、その触発の強度が増すほど、美のロマン的契機は後退する。ロマン的な美を湛（た）える眼差しは、澁刺（はつらつ）、瑞々しさ、聡明、慈愛、親密、包容、歓待の感覚を喚起するが、エロティックな眼差しは、その色彩と隈取りによって、際どさ、危うさ、妖（あや）しさ、誘惑、禁止と挑発、扇情、墮落、共犯を含意（コノート）する。／われわれは誰でも、この二種類の美の意味の違いを知悉（ちしつ）している。憧れの美と誘惑の美と。この二種の美は、本質的に、人間の

幻想的世界が日常の生活世界の彼岸に疎外した、ロマン的世界の快と侵犯的な快の領域を代表する。」(396-397)

・トルストイ『性慾論』の引用。「異性の体現化された美は、一方でエロティシズム的情熱の対象の意味であり、もう一方で人間のロマン的欲望の対象の意味である。」(397)

・バタイユの考察。エロティシズムの本質は、「美を汚(けが)す」ということ。「美において体現された女性性、禁止され(それゆえ聖化され)たものとしての女性性を、この禁止を踏み越えて侵犯するという幻想において現れるエロスである。」(398)

・さらにバタイユは、エロティシズムと死の関係を指摘。エロティシズムとは、「死にいたるまでの高揚」である。エロスの欲望の領域は、「性的蕩尽の領域」であり、それは「暴力」や「死」につながる一般的禁止の領域である。(399)

・「わるいー快」の領域：いたずら、エロス、暴力。(400)

・「こうして、人間の性的衝動は、男性においては、禁止を受けたものとしての女性の身体的エロスを、“侵犯において味わう”独自の欲望対象となし、女性においては禁止された自己身体によって異性の欲望を引きつける独自の欲望として形成される。ここでは、異性の「美」は、禁止された身体性の「侵犯」(恥ずかしがらせることー恥ずかしがること)にかかわる幻想的エロスとして、言いかえれば、「ロマン的な幻想」としてではなく、禁止をめぐる幻想的な侵犯性として味わわれることを意味する。」(400-401)

・「誘惑的エロティシズムは何をその的とするか。誘惑するためには裸体に近ければよいわけではなく、女性の「肉体」がどのようなものとして暗示されるかが問題となる。エロティックな化粧や装いやコスチュームの核心は、美的な艶やかさの強調と、その禁止領域を意識させること、飾り立てることによって、女性美を価値高きものとして権威づけ、しかも侵犯につきまとう不安を統御して挫折が起こらぬように救いの手を差しむけることにある。ここでは「欠如したもの」の換喩性が入り込む余地はない。女性的美という禁止によって隠された「本体」を、一方で秘匿しつつ、境界線、裂け目によってこの秘匿を強く意識させ、その踏み越えを促すこと、このことでエロティシズムの欲望は、さまざまな誘惑的フェティシズムの形態へと展開する。」(401)もし秘匿しなければ、エロティシズムも消える。

・「問題なのは、われわれが美を通して欲望しているものである。恋愛の美がきわめてしばしば「みせかけ」「たぶらかす」ものとなるのは、いわば美の威力が人間の視覚にとって眩しすぎるからである。恋愛における美は、われわれ自身のロマン的幻想の体現、その化身として現れる。にもかかわらず、われわれがその美を通して直観し求めるのは他の「人間」の存在であり、その美質である。恋愛の欲望の「この上なさ」は、美の「本体(アイデア)」が示す永遠性や無限性ではなく、他者存在の本質のうちに孕まれているわれわれの欲望の理念としての永遠性や無限性にほかならない。」(410)・「エロティシズムの欲望は、その本質を、われわれが公共生活において一般的善と規範を守りつづけなければならないという不断の重力に対する反動力、この内的規範の攪乱と侵犯の幻想のうちにもつ。美はここでいわば「自己」内面化された禁止一般の換喩となり、エロティシズムの情熱は、他者の美と美質をおのが欲望のために利用し消費する。恋愛の絶対感情においては、他者は、それが備える美と美質においてロマン化され、完全化され、理想化される。」(411)